最近，胸を打った本

『御巣鷹山と生きる～日航機墜落事故遺族の25年』

美谷島邦子 著　新潮社　1,470円（税込）

悲しみ・苦しみを「炎」として自分が生きている意味を考えたい

会員　箱山 由実子（60期）

今年2月，私は，日本航空の会長に就任した稲盛和夫氏が「日航安全啓発センター」を見学したとのニュースを知った。同センターは，今から25年前の1985年8月12日に520人の方々が命を落とされた日航ジャンボ機墜落事故の残骸や遺品を展示して，安全を啓発する場として2006年4月に開設された施設である。私は，友人を昔飛行機事故で亡くしたという知人の話をふと思い出し，日航機事故関連の本を何冊か読んだ。事故の状況は私の想像をはるかに超えていて，私は息が苦しくなり，一人で声を上げて泣いた。ご遺族の痛みは計り知れない。

私は，事故があった御巣鷹山で，祈り，自分が生きていることの意味を考えたいと思った。そして，「8・12連絡会」の事務局に電話をかけ，もし許していただけるなら，今年の慰霊登山に参加させていただきたいとお願いした。同連絡会の事務局長であり本書の著者でもある美谷島邦子氏は，快く了解して下さり，会報「おすたか」や，毎年慰霊登山をしておられるというノンフィクション作家の柳田邦男氏による本書の紹介記事を送って下さった。柳田氏の「喪失と悲しみの中で…自らも心を成熟させていった美谷島さんの…」という文章に惹かれ，私は本書を手にした。本書の帯には，「9歳の息子を失った私は，悲しみを，力に変えた。」と書かれていた。著者の25年間の活動は，まさにその通りである。

本書の中に「私は，悲しみは乗り越えるのではないと思っている。亡き人を思う苦しみが，かき消せない炎のようにあるからこそ，亡き人と共に生きていけるのだと思う。」という一文がある。

私も，幼少の頃から現在も，様々な悲しみや苦しみを抱えている。おそらく一生そこから逃れることはできないだろう。本書を読みながらこんなことを言うとお叱りを受けるかもしれないが，死んだほうがどれほど楽かと思うこともある。しかしその一方で，私は，自分を生に繋ぎとめる強い力も感じてきた。私の父親はシベリアから生還し，私は戦争に怯えることも飢えることもなく，教育を受け，行きたい所へ行き，したいことをし，病気になっても怪我をしても治療され，飛行機に命を託しても，生きてきた。私の命は，どれほど沢山の命の上にあることかと思う。生かされている命を，私も存分に全うしたい。悲しみや苦しみを「炎」として。

本書の中には，ご遺族の方々の言葉やエピソードも記されている。一つ一つが，私の胸を打った。520人の方々の魂が，25年という時を越えて，心が衰弱して倒れそうになっていた私に，力を与えてくれた。

8月12日。御巣鷹山で，私は，『命を大切にする繋がり，社会，世界を築いて‥』という想いを感じるような気がしている。それは，生きている私たちの，魂の願いでもあるのかもしれない。